

# 「道」「坂」考

伊澤正俊

## 1 はじめに

筆者は、「道行考——『行路死人歌唱和論』を踏まえて——」（『専修国文』第八十六号）において、万葉第二期の歌人、柿本人麿の巻二 一三一、一三五いわゆる「石見相聞歌」、巻一「或る本の、藤原京より寧楽宮に遷れる時の歌」の題詞を持つ七九、第四期の歌人、大友家持の「防人の別を悲しぶる情を陳べたる歌一首」の題詞を持つ巻二十四四〇八において、「隈」毎にかへり見を行い、家郷、肉親の魂と自身を結び付けようと古代の旅人は試みたとした。そしてまた筆者は次の様にも述べた。

最後に述べておきたいのは、「たもとほり」「廻み」である。人は神になりたがる。何故なら人間に叶わない事を実現してくれるのが神だからである。そこで神の行為を模倣する。神の形を模る。安全無事を保証してくれると思ひ込んで男女はツマの元に撓んで赴くのである。

こうして並べてみると、先の論は道や川が直線で故郷と繋がっていた方が旅人にとっては都合が良く、家郷、肉親と結び付くことになるといふ論になる。

一方後の論は、蛇神の神婚の疑似体験としてまわり道、遠回りをしてツマに逢いに行くと考えており、道が曲がくねっていた方が男女にとって都合が良いと考えている。

この二つの論は、後に述べることで納得してもらえると考えるが、決して矛盾するものではない。だが、上手く住

み分けができる論が必要であろう。本稿では、そこを丁寧述べつつ新しい論を展開して行くことにする。

まずこの二つの論の決定的な違いは、既婚（同居婚）か未婚（あるいは非同居婚）かということである。先の論は既婚者、あるいは既婚者であっても恋情をツマとその家や家郷、肉親（ツマを除く）に求めている者達のものであるということである。

そして後の論は、既婚者（重婚を求めているのである。）でも良いが、基本的には未婚者、多くは非同居婚者であり、ツマを求めて行くツマ問ひ婚の男女が対象となる。

この区別によって、ミチは前者は直線の方が良く、後者は曲がりくねっていた方が良いのである。

このポイントをおさえておくと、『記』の八千矛ノ神にまつわる一首、それは神語の一首、須勢理毗売命の歌が良く見えて来る。

八千矛ノ 神ノ命や 吾が大国主 汝コソは 男に坐せば 打ち廻る 島ノ崎々 搔き廻る 磯ノ崎落ちず 若  
 草ノ 妻持たせらメ 吾はモヨ 女にしあれば 汝を除て 男は無し 汝を除て 夫は無し 綾垣ノ ふはやが  
 下に 苧衾 柔やが下に 栲衾 騒ぐが下に 沫雪ノ 若やる胸を 栲綱ノ 白き腕 撫き 撫き交がり 真玉  
 手 玉手差し枕き 百長に 寝をし寝せ 豊御酒 献らせ

注目したいのは、この歌の「汝コソは 男に坐せば 打ち廻る 島ノ崎々 搔き廻る 磯ノ崎落ちず 若草ノ 妻持たせらメ」の部分である。

ここでは八千矛ノ神、大国主はどのような恋の道の取り方をするのが良いのであろう。須勢理毗売命がこの歌で認めているのは一夫多妻制である。「汝を除て 男は無し 汝を除て 夫は無し」と歌っている。この特殊性を持つ八千矛ノ神の妻問ひはどう読めるであらうか。

先程から述べているように既婚者は家郷と直線で繋がっている方が安全無事である。ところが八千矛ノ神はこの歌が示すところによると重婚が可能な立場にあり、「島ノ崎々」や「磯ノ崎」に妻を持っているようである。

ここで考えたいのが先に述べた直線志向である。八千矛ノ神は「廻る」時にかへり見をしない。筆者はそう考えている。かへり見をしないから正妻との間の夫婦としての呪術が絶ち切れる。安全は保証されないかもしれないが、正妻の魂に取り憑かれなくて済むのである。そこで他の女と交わることが可能となる。逆にかへり見しないで廻らないと夫婦の関係は絶ち切れないのである。そこで「廻る」度に以前の女神との関係は絶ち切れる。また新しい女神との関係を結べるのである。限られた男神にだけ与えられる特権である。

## 2

そこで次に考えてみたいのが、また戻るようであるが男女は何故ツマに逢う為に撓んで行くのかということである。筆者は当時の婚姻制度を根本から考えてみたい。後世の『伊勢物語』、筒井筒の段で想起されるように、女性は男性を縛ることができなかつたのではなからうか。特に記紀万葉の時代においては婚姻制度は非常にデリケートであり、男も女も通う通わないの関係であり、我々近現代人の考える婚姻制度などというものはそもそも存在しなかつたであらう。

その様に考えて行くと、「たもとほり」「廻み」において別な考え方ができるのではなからうか。神の行為を模倣す

る、即ち神婚を行うと考える一方、前ツマとは違う新ツマを訪ねる時は、前ツマとの魂で結ばれた関係を絶ち切る為  
に、「たもとほり」「廻む」時に、隈でかへり見をせず、新しいツマを取るという選択をしたのではなからうか。男女  
間のそれまでの呪術（的關係）を絶ち切る為、撓んで赴いたのであろう。

そうであるなら古代においては婚姻とは都合が良いもので、一度一度の逢瀬が神婚であり、またパートナーを変え  
ることも可能であったということなのではないだろうか。そしてそれもまた神婚となるということであろう。

3

筆者は荒唐無稽なことを述べているのであろうか。ここで傍証として挙げておきたいのが直線で道を行くという歌  
である。「道行考」でも一首 三三三三九を掲げたが、それに加えて卷十三 三三三三五も掲げておく。

玉梓の 道行く人は あしひきの 山行き野行き ただうみの 川行き渡り 鯨魚取り 海道に出でて 畏きや  
神の渡は 吹く風も 和には吹かず 立つ波も 凡には立たず とゐ波の 塞れる道を 誰が心 いたはしとか  
も 直渡りけむ 直渡りけむ  
(卷十三 三三三三五)

玉梓の 道に出で立ち あしひきの 野行き山行き ただうみの 川行き渡り 鯨魚取り 海路に出でて 吹く  
風も おほには吹かず 立つ波も のどには立たず 恐きや 神の渡の 重波の 寄する浜辺に 高山を 隔に  
置きて 沖つ藻を 枕に纏きて うらも無く 偃せる君は 母父の 愛子にもあらむ 若草の 妻もあるらむ  
家問へど 家道もいはず 名を問へど 名だにも告らず 誰が言を いたはしみかも とゐ波の 恐き海を 直

さて問題にしたいのは明瞭で三三三五の「直渡りけむ 直渡りけむ」三三三九の「直渡りけむ」を中心としたものである。三三三五の講談社文庫本訳に「まっすぐ渡っていったのだろう。真っ直ぐ渡っていったのだろう。」とある。

残念ながら三三三九にはその様な訳は無い。三三三五の訳はそのまま訳したものだが何故二度繰り返し、二度目は小書きにされているのだろうか。三三三五自体を読んでわかるとおり、この歌は鎮魂歌であろう。恐らく三三三五の段階で行路死者を目にしている様に考えられる。これに異論は出ないのではなからうか。小書きにされたのは歌い物として歌われた証拠であろう。恐らく行路死者の鎮魂を祈念して定期的に祀ったのであろう。筆者が重要視して述べたいのは、真直ぐに渡って行くという表現であり、これは「たもとほり」でも「廻み」でもなく、それと真逆の関係であるという点である。真直ぐに渡って行くというのは、家郷、肉親と繋がっているよと死者に呼びかけ、慰撫しているということである。家郷、肉親と魂も繋がっているよと言霊に挙げて歌い挙げてということである。何故ならかへり見をせずとも家郷や肉親と真直ぐに繋がっているからである。この「直渡りけむ 直渡りけむ」の直線性と三三三五全体の歌が持つ直線性は切っても切れない関係であり、これを否定する人はいないと思われる。

残念ながら三三三九は行路死者の道行はあるが、死者の姿を表現し、筆者が「行路死人歌唱和論——再死の呪歌——」(『上代文学』第六十二号)で述べた「家問へど 家道もいはず 名を問へど 名だにも告らず」の唱和表現を持つっており、三三三五の様な歌全体の持つ直線性が死んでしまっている。本来土着の歌い物であった三三三五を都風の行路死人歌に変えてしまつて直線性、原始性が消えてしまった。

行路死人歌とは、「道行考」で述べたことを簡単にまとめると、道行きと死者の姿を表現して再死させるものであ

る。<sup>(注)</sup>そして「行路死人歌唱和論」で述べた唱和表現を加えたものが都風の定型の一般的なものである。筆者が考えるに、三三三五の様な土着の共同体の民が歌う行路死人歌と、「旅」を行う様になつた都人の、より一層深刻なため深化した三三三九の様な行路死人歌は同時代に存在してはなかつたか。

何故その様な二種類の歌が同時代に存在したのか。筆者は鎮魂の性質にあると考えている。三三三五の様な土着の歌はその共同体内で行路死者を葬つて、定期的に祀り続けられれば良い。一方都人の方は、行路死者を葬つたとしても旅を続けなければならない。当然「行路死人歌唱和論」や「道行考」で述べた様に、言葉を多く用いて一回性の鎮魂の質、量、度合いを高めなければならなかつたのである。

そう考へて来ると「行路死人歌唱和論」で「三三三五は、行路死者の故郷、家、肉親を喚起する表現に対する唱和の表現が存在しないので、鎮魂を目的とした行路死人歌の長歌とは認められず、今は扱わない。」としたが、ここで丁寧に説明しておかねばならない。今述べた様に三三三五も海辺の共同体における行路死人歌であり、旅人が鎮魂するのでは無く、その共同体が鎮魂するのである。

それでは三三三六はどうであろうか。掲げておく。

鳥が音の きこゆる海に 高山を 障になして 沖つ藻を 枕になし 蛾羽の 衣だに着ずに 鯨魚取り 海の  
 浜辺に うらもなく 宿れる人は 母父に 愛子にかあらむ 若草の 妻かありけむ 思ほしき 言伝てむやと  
 家問へば 家をも告らず 名を問へど 名だにも告らず 泣く児如す 言だにいはず 思へども 悲しきものは

世間にあり 世間にあり

(卷十三 三三三六)

これはやはり海辺の共同体で行われた鎮魂歌であり、「家問へば 家をも告らず 名を問へど 名だにも告らず」との表現を持ち、「家を問うて答えてくれたなら家に知らせてあげよう。名を問うて答えてくれたなら家に知らせてあげよう。」と詠んでいるようなもので、この表現で鎮魂しているのである。

巻五 八八六の行路死者、熊凝の立場に立つて熊凝自身がその臨終の際に詠んだとした表現をとっている山上憶良の長歌を掲げておく。

うち日さす 宮へ上ると たらちしや 母が手離れ 常知らぬ 国の奥処を 百重山 越えて過ぎ行き 何時し  
 かも 京師を見むと 思ひつつ 語らひ居れど 己が身し 勞しければ 玉粹の 道の隈廻に 草手折り 柴取  
 り敷きて 床じもの うち臥い伏して 思ひつつ 嘆き伏せらく 国に在らば 父とり見まし 家に在らば 母  
 とり見まし 世間は かくのみならし 犬じもの 道に臥してや 命過ぎなむ (一は云はく、わが世過ぎなむ)

この「国に在らば 父とり見まし 家に在らば 母とり見まし」と、詠んで死んで行った行路死者に対して今の様に唱和してあげるのは鎮魂となり、海辺の共同体は崇られることが無い。

恐らく海辺の共同体では三三三五の型の鎮魂歌と、三三三六の型の鎮魂歌が並立して存在したのであろう。

そして三三三五の歌と三三三六の歌を知った調使首は上手く都風の行路死人歌に作り上げたということであり、「道行考」で述べた、「佐竹昭広氏の三三三六から三三三九へとの成立の順序を見ているが疑問が残る。」としたが、疑問は残らず、成立の順序は佐竹氏の考えたとおりで良いのだと思う。ただし「調使首見屍作歌一首」(『万葉集抜書』)に出て来るような民俗学的手法では無く、調使首は三三三五と三三三六を行路死者に対して歌う鎮魂歌二二

○や、一八〇〇の様に紙の上で、即ち書くことによつて結び付けたと考えるべきであろう。海辺の共同体には三三三三、五、三三三三六の二種類の行路死人歌があり、都人が旅の途中で行路死者を見つけた卷二 二二二〇、卷九 一八〇〇、卷十三 三三三三九の様な行路死人歌が共に並立していたのであろう。

4

次に考えたいのが、道にありがちな坂の問題である。まず中卷崇神記にあらわれる疫病の問題である。大物主神は崇神天皇の夢に現れて、「是者我之御心ソ。故、意富多と泥古を以ち而、我が前を祭ら令メ者、神ノ氣起ら不、国亦安平ケくあらむ。」と告げる。そこで意富多々泥古を神主として「御諸山於意富美和之大神ノ前を拝き祭りたまひき。」として祭らせる。また伊迦賀色許男命に命令して天之八十毗羅訶を作らせ、天神地祇之社を定めた。これで大物主神を祀つたのだからよしとなりそうなものだが、そうとはならず、

又、宇陀ノ墨坂神於赤色ノ楯矛を祭りたまひき。又、大坂神於黑色ノ楯矛を祭りたまひき。又、坂之御尾神ト河瀬神及於、悉遺忘るるコト無くて幣帛奉りたまひき。

と要所の坂と河の瀬を祀る。特に表現を割いているのが坂に対してである。こうして祀ると「役ノ氣悉息み、国家安平ケくありき。」となる。河の瀬に対しては別稿で考えたい。今問題にしたいのは坂を祀るのは何故かという点である。坂は共同体の境であることが多いから疫病の侵入口としてある。そこを祀るのは当然だが、これでは陳腐な解答になってしまう。勿論ここでは「神ノ氣」「役ノ氣」を防ぐといった点に力点が置かれているが、それだけでは無



いのではなからうか。

後に景行記においてヤマトタケルは「足柄之坂本に到り、御糧食す処於、其ノ坂ノ神白き鹿に化り而来立ちぬ。食して、即ち其ノ咋ひ遺したまへる蒜ノ片端以ちて待ち打ちたまへ者、其ノ目に中りて乃ち打ち殺したまひき。」とある。

またヤマトタケルはその後「科野之坂ノ神を言向ケ而、」とこの坂神を恭順させる。

これらは何を表しているのだろうか。筆者は以前「征服王・ヤマトタケルの鎮魂」(『専修国文』第四十六号)においてヤマトタケルが征服王としてあつた点を述べた。しかしこの問題には触れなかった。

坂の神を恭順させる、退治するという事は疫病を起らせなくさせるといふ点も全く無いとは言わないが、そうでは無く、領地を占領することと同じではなからうか。

その前の崇神記に大毗古命が「東ノ方十二道に遺し而、其ノ麻都漏波奴人等を和平さ令メたまひき。」とやはり征討を続けているが、その後「故、大毗古命、高志国於罷り往く時、腰裳服る少女、山代之幣羅坂に立ち而歌ひて曰く、」として少女が歌つた歌は、

御真木入彦はや 御真木入彦はや 己が緒を 竊み殺せむト 後つ戸よ い行き違ひ 前つ戸よ い行き違ひ  
窺はく 知らにト 御真木入彦はや

である。そして大毗古命は天皇にこの歌を伝え、天皇は庶兄建波迹安王の謀反と理解する。そこで大毗古命は丸迹臣之祖、日子国夫玖命と共に軍を起こすが何故か「丸迹坂於忌瓮を居多而罷り往く。」そして建波迹安王軍を破り、崇

神天皇は「初国所知らしし御真木天皇」となる。

また下巻履中記において、墨江中王が謀反を起こすが、阿知直が救助して倭に逃げた時、「故、大坂ノ山口に到り幸す時、一ノ女人遇ひたまへり。其ノ女人白之さく、『兵を持てる人等、多に茲ノ山を塞へたり。当岐麻道自り、廻りて越え幸す応し。』トまをす。」と言われて難を逃れる。

このように坂に少女や女人が立って王権側に付いて歌や言葉で謀反や敵の居場所を教える。

これは坂の神が味方をしているのではなからうか。先の崇神記において大物主神を祀った事により、坂の神を天皇霊が支配したからなのではないだろうか。支配とは言わなくても、坂の神が味方になってくれた、祀った御礼に天皇の側に付いてくれたという事ではないのだろうか。崇神記の祀った一件は、「国家安平ケくありき。」だが、国中の坂を祀ることによって坂の神をコントロールすることに成功したのでは無いか。坂は危険な地域であり、そこをコントロールすることは皇軍を上手くコントロールすることになる。また坂をコントロールすることは、道をコントロールすることでもある。道の選択は、戦を左右する。履中記において当岐麻道を選択することが結局は勝利に導いた。

坂の神と道の神は我々が考える以上に近接しているのではないか。坂を制するもの、戦を制す。道を制する者、戦を制す。これは古代からも当然そうなのではないだろうか。坂では引き返すことができる。軍隊にとっては大問題である。繰り返しになるが坂を制する者は戦を制する者なのではなからうか。履中天皇は、あのまま行き当岐麻道を通らなければ殺されていたことだろう。

坂神を祀ることは皇軍にとつては当然のことである。ヤマトタケルが足柄の坂本の神を退治し、科野の坂本の神を言向けたのも東の方を征討して来いと景行天皇に言われたとおりのことをしたまでである。

崇神天皇やヤマトタケルが行ったのは坂神の懐柔や征服であり、こうして見て来ると中巻下巻は国土征服譚であ

り、坂神をいかに味方にしたかという点からも見られるのではなからうか。

坂には当然荒ぶる氣(怪)がいるのだろう。万葉集卷九 一八〇〇の「足柄の坂を過ぎて死れる人を見て作れる歌一首」などはこの氣(怪)に襲われたのだろう。

それでは大毗古命と日子国夫玖命は何故「丸迹坂於忌瓮を居ゑ而罷り往く。」という行動を取ったのだろう。

思想体系本によると松村武雄説を引き、「これは地堺祭儀で、自己集団の神の加護を得て身の安全を祈り、他方、他集団の神の災を払う儀礼であるという」。万葉集にある歌を次の様に説明している。「『甕瓮を忌ひ穿り居ゑ』(三七九)、『草枕旅ゆく君を幸くあれと甕瓮すゑつ吾が床の辺に』(三九二七)などと歌われているのは、同類の儀礼の流れに属し、忌瓮が旅する人や遠く離れた人の身の安全を祈る祭りにだけ据えられることに転化している。」としている。

これでは広義過ぎてこの場面の説明にはもう少し詳述しなければならない。何よりも坂に忌瓮を据えた点を考えねばならないだろう。これは坂の神に対しての寄進でありまた祈願でもあると考えるのが素直なのではなからうか。これは軍隊の坂における優位性を確立するために行ったのではないか。丸迹坂がどの坂を指すかはまだ確定していないが、戦の要所、軍の戦略拠点であったのだろう。また日子国夫玖命は丸迹臣之祖であるから、祖先神に自分の武功と無事を祈ったのも当然であろう。後者だけに囚われがちだが、実は前者の意味の方が大きいのではなからうか。

## 5 坂神三神考

定説のごとく、坂合ひが境になったのは『風土記』、『万葉集』に色濃く残っている。例えば『出雲国風土記』に

三次の郡の堺なる三坂に通るは、八十里なり。

とあるように直接境が坂だと出てくる。また『播磨国風土記』には

甕坂は、讃伎日子、逃去ぐる時、建石命、此の坂に逐ひて、いひしく、「今より以後は、更、此の界に入ること得じ」といひて、即ち、御冠を此の坂に置きき。一家いへらく、昔、丹波と播磨と、国を堺ひし時、大甕を此の上に掘り埋めて、国の境と為しき。故、甕坂といふ。

とあるように坂が境になっており、国の境を甕坂としている。

また『万葉集』を見ると、

水江の浦島の子を詠める一首并せて短歌

……水江の 浦島の子が 堅魚釣り 鯛釣り矜り 七日まで 家にも来ずて 海界を 過ぎて漕ぎ行くに……

(卷九 一七四〇)

東路の手尼の呼坂越えて去なば吾は恋ひむな後は逢ひぬとも

(卷十四 三四七七)

帰廻の道行かむ日は五幡の坂に袖振れわれをし思はば  
 (卷十八 四〇五五)

ひなくもり碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも  
 (卷二十 四四〇七)

足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも  
 (卷二十 四四二三)

のように境界意識が見て取れる、また、

足柄の み坂たまはり 顧みず 我は越え行く 荒し男も 立しや憚る 不破の関 越えて我は行く 馬の蹄  
 筑紫の崎に 留り居て 我は斎はむ 諸は 幸くと申す 帰り来までに  
 (卷二十 四三七二)

色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む  
 (卷二十 四四二四)

など、前歌講談社文庫本脚注に「峠越えを、当時は神から坂を賜わると考えた。」後歌同脚注「神から許可をえて越えることができる。」とあるように、神に賜わり、許可を得て通るものであった。その他数多く「御坂」と表現され、神が領知する場所が坂であったことがわかる。

こう見て来ると、『記』で水歯別命(後の反正天皇)が曾婆訶理を刺殺する場面が良く見えて来る。それは「大坂の山口に到りて以為さく、」と表現され、大坂を登る前に、

「曾婆訶理、吾が為に大き功有れ雖、既に己が君を殺せしは不義し。然あれドモ、其ノ功を賽い不は、信無しト謂ひつ可し。既に其ノ信を行はば、還りて其ノ情に惶る。故、其ノ功を報ゆれ雖、其ノ正身を滅してむ。」トおモほす。

と考へ、「其ノ山口に留まる即ち、仮宮造り、」、大臣就任の酒宴を開き、刺し殺してしまふ。これは水歯別命に神が憑り付いてこのような考へを齎したのではないか。この神は坂の神なのではなからうか。そして坂神は『記』において天皇家を守る守護神の役割を果たしている。何故かと言うと、崇神記において、前に述べたように「疫病多に起り、人民尽きなむト為。」すると大物主大神が崇神天皇の夢に現われて、これは私の意志だ。として、意富多々泥古をして、自分を祀らせた。すると、

又、伊迦賀色許男命に仰せて、天之八十毗羅訶作らしメ、天神地祇之社を定メ奉りたまひき。

そして先述したように「宇陀ノ墨坂神」や、「大坂神」そして至るところの坂の神、河瀬の神、を祀ると国家太平となり、疫病は無くなる。この時点で天皇側は全ての坂を祀っており、国家を安らげること成功している。

そこでこれも先述したが「大毗古命、高志国於罷り往く時、」「腰裳服る少女」が「山代之幣羅坂」に立ちて「御真木入彦はや……」と歌う。そして庶兄建波迹安王の反乱が発覚し、阻止することに成功する。これは坂の神が皇神の味方をしたからに他ならない。「即ち其ノ所如モ見シ不而忽ちに失せぬ。」と少女が表現されているのも神女の証拠である。これは引き続いての坂神の助け舟に他ならない。

履中記における墨江中王の反乱も先述したように「大坂ノ山口」で、「一ノ女人」に遭遇し、「兵をもてる人等、

…当岐麻道自り、廻りて越沼幸す応し。」と神女がアドバイスをする。この神女も皇軍の味方であり、今述べたように祀り挙げているから手助けしてくれたに間違いない。坂の神を制した（祀り挙げた）天皇家に失点は無い。

そして坂の入口や坂の上では人は何かをしなくなるのではなからうか。例えば『播磨国風土記』の琴坂について

琴坂と號くる所以は、大帯比古の天皇のみ世、出雲の国人、此の坂に息ひき。一の老父ありて、女子と俱に坂本の田を作りりき。ここに、出雲人、其の女を感じしめむと欲ひて、乃ち琴を弾きて聞かしめき。故、琴坂と號く。

水歯別命と同様、神に憑り付かれたのである。

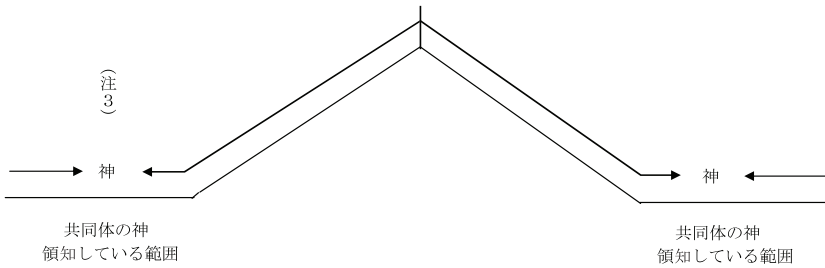
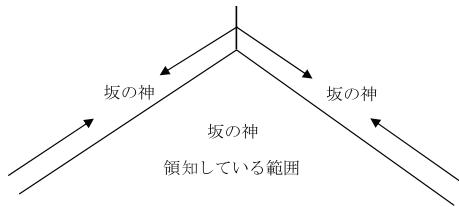
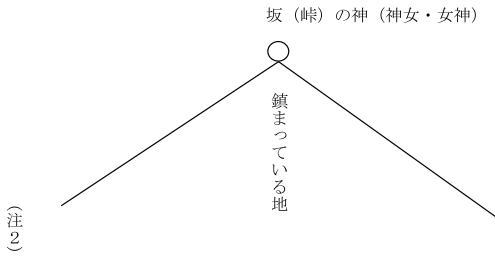
こう見て来ると、『万葉集』で坂の上（峠）で手向けする歌が数多くあり、御坂と表現され、坂神（峠の神）が存在することに疑いは無い。しかしここにだけ神がいるというわけではないだろう。それは万葉歌

い行会ひの坂の麓に咲きををる桜の花を見せむ児もがも

（巻九 一七五二）

でわかる。「い行会ひの坂」とは講談社文庫本脚注に「両国の神が行きあつた坂を国境とした伝説によるという。」とあるように両国の神が坂を境とした神話が数多くあつたことであろう。こうして見ると坂と神の関係は左の三つの図に示せるのではなからうか。

古代の人々には、このような三重層の坂神の意識（というより認識）があつたのである。または共同体、地域ごとにどれかの認識を持っていたのである。これを筆者は古代人の坂神三神考と名付けておきたい。





ちなみに崇神紀は、

和珥坂の上に到る。時に少女有りて、歌して曰はく、一に云はく、大彦命、

山背の平坂に到る。時に、道の側に童女有りて歌して曰はく、

御間城入彦はや 己が命を 弑せむと 竊まく知らに 姫遊すも

一に云はく、大さ戸より 窺ひて 殺さむと すらくを知らに 姫遊すも

と歌い、自分は歌っているだけだと言って、「乃ち重ねて先の歌を詠ひて、忽に見えずなりぬ。」と表現されている。

また履中天皇即位前紀では、

大坂より倭に向ひたまふ。飛鳥山に至りまして、少女に山口に遇へり。問ひて曰はく、「此の山に人有りや」と  
のたまふ。対へて曰さく、「兵を執れる者、多に山中に満めり。廻りて当摩徑より躡えたまへ」とまうす。

となっている。両者共に坂神三神考の中に収まっているには納得していただけるだろう。

## 6 おわりに

このように道と坂の問題を再検討して来たが、従来の道や道行きについての考え方、坂についての考え方に、私見を加えて良いのではなからうか。管見の限りでは、ここまで道や道行、坂について考察したものを知らない。古代の

道や道行、坂についての考え方に新風を吹き込めることができているれば幸いである。また他の考え方を御指導御鞭撻頂ければこれを上梓した冥利に尽きる。

注1 道行表現と死の姿を表現することによつて、かへり見したことになる、肉親、共同体と結びつけ、死の姿を詠

み上げ、あたかも家郷の人々に看取られたかのように詠んでやり、正常死に準じさせて再死させるのである。

2 逸文 筑後国風土記に「昔、此の両の国の間の山に峻しく狭き坂ありて、往来の人、駕れる鞍轡を摩り盡されき。土人、鞍轡盡しの坂と曰ひき。三に云はく、昔、此の堺の上に鹿猛神あり、往来の人、半は生き、半は死にき。」そして逸文 伊勢国風土記に「安佐賀社」で、「安佐賀山に荒ぶる神あり。百の往人をば五十人亡し、四十の往人をば廿人亡しき。」とあるように、悪さを行う神もいる。

また、『播磨国風土記』に「志深の里。三坂に坐す神は、八戸挂須御諸命なり。大物主葦原志許、国堅めまし以後、天より三坂の岑に下りましき。」とはつきりと「三坂の岑に下りましき。」と表現されているものもある。

3 共同体の神が、坂神の役割を果たすということである。

本稿における『古事記』の引用は『古事記』（日本思想大系）に拠る。

『万葉集』の引用は『万葉集』（講談社文庫）に拠る。

『日本書紀』の引用は『日本書紀』（日本古典文学大系）に拠る。

『風土記』の引用は『風土記』（日本古典文学大系）に拠る。